# 講義の風景

総合政策学部
## 中沢新一教授
*Shinichi Nakazawa*

「比較宗教論」［前期木曜日4限］

### 他学部生、他大学からも…

単位のためではない、こころの底から自分が学んでいる感じがして、そしてそれが終わった後は充実感で満たされてしまうような講義ってどれくらいあるのだろうか。ハマッてしまったら、ノートに書き写したいことがありすぎて前の晩あまり寝ていなくても居眠りなんてする暇がない！　それぞれの学生にそんな特別な講義の時間がきっとあるだろう。

学部生だけではなく、他学部、他大学からも聴講生がやってくる。遅刻しようものなら座る席がないほどに。先を競うようにして、この日（5月27日）も8号館8103教室は満室になった。

「比較宗教論」という講義名から、色々な宗教の比較研究かと思いがち

## 滑らかに、スリリングに「アジール」論の現代性

だが、神話の構造から一神教の成立、近代を撃つ「野生の思考」……自然とともにある人間の思考と感覚の全体を、新しい可能性に向けてめぐるのである。今期は「自由の体系」。

「そもそも私たちは、自分の本質として与えられた自由を実現するために生まれてきました。その自由は、DNAにも束縛されることがないのです」

中沢教授は、いつものように、穏やかな口調で語り始めた。

《アジール》という言葉がボードに書かれる。きょうのテーマである。それ自体は新しくないが、その横に、《自由》そして《聖なるもの》という文字が等号で並ぶところに、オリジナルな論の展開を予感させるのだ。

### なかざわ・しんいち　1950年生まれ。東京大学大学院修士課程修了。東京外語大AA研助手のあと93年から現職（宗教学）。『チベットのモーツァルト』『森のバロック』『緑の資本論』など著書多数。

### 昨年講義は話題の5冊本に

『人類最古の哲学』『熊から王へ』『愛と経済のロゴス』『神の発見』『対称性人類学』。講談社・選書メチエの全5冊刊行がこの春完結した。昨年度の講義をまとめたものである。講義（録）が一般書として広く評価され読まれることは、数少ない。加藤典洋・明治学院大学教授の『言語表現法講義』も話題になったが、講義と同時並行で5冊ものシリーズ刊行はちょっと例がない、と出版プロに聞いた。まして、紀伊国屋ホールで完結記念の講演会もという例は、と。

01年9・11の米国同時テロ、それにつづく米のアフガン攻撃、そしてイラク戦争の情況をめぐる批評論壇で、「非対称（性）」というタームが飛び交う感があった。米の「帝国」化と第三世界などの極貧化・周縁化という世界構造への言及だが、「圧倒的な非対称」と最初に発したのは「宗教学者　中沢新一」だった。《世界を覆う圧倒的な非対称を内側から解体していく知恵……神話的思考の中に生きているような対称性の思考を、現代に鍛え上げることで、新し

い思考の形態を創造すること――今学期の講義で私は全力を尽くして、その課題に取り組んできました》と第5巻あとがきに書いている。

学生にとっては、そんな授業に立ち会っている、ある種の興奮、あるいはスリリングさ。前の席で熱心にメモをとっていた他大学の大学院生（女性）は「学説の解釈ではなく、思想の生成の現場なんですよね。それを生で聴く魅力。他では聴けない授業です。私の専攻はフランス文学なのですが、脱領域的な思考の広がりと展開に、ドキドキしながら、最初から聴講しています」と言った。

中沢教授の講義中の写真じたいが珍しいかもしれない。オズオズと撮った１枚

## 自由の聖域―「善悪の彼岸」

「アジール」。法や権力が及ばない、「不可侵の領域」を指す。都市国家ローマの時代から西洋の例がよく知られるが、中世日本にも実在したことを、歴史学は教える。典型的には戦国末期の、たとえば寺社や聖所や、山林などもそうだったという。罪人もそこへ逃げ込めば、追捕の手は及ばなかった。借金で首の回らない者も、嫌な結婚から逃げだしたい女性も「寺石に手を触れた」瞬間に、拘束や義務から自由になることができた。「縁切り寺」、「駆け込み寺」は江戸時代までながく続いた例である。

社会のなかに、公然とあるいは密かに、開いた「自由の空間」。

《善悪の彼岸》――教授はそんな言葉も使った。ニーチェだ。

講義は、16世紀後半、九州・対馬の天童山に見られたアジール空間をめぐる。配られたプリントに、故平泉澄（きよし）氏の研究論文の引用がある。戦前の「皇国史観」で著名な博士は、若き日、わが国で最初に「アジール」を発見した研究者でもあったのだ。戦後タブー視された氏の著作に出合ったのは院生の時代、叔父にあたる中世社会史家、網野善彦氏（故人）を通してだった、という。評論「僕の叔父さん――網野善彦の思い出」（文芸誌「すばる」に7月号まで3回連載）にくわしく出てくる。

租税すら免除された森に踏みこんだ興奮も伝える平泉論文のテキストを読み解きながら、世俗との縁から開放された時空にやどる「聖なるもの」に、教授は触れていく。

それは宗教体験に見られる「神」の概念。自我を超えた、圧倒的でなにかおどろおどろしい力。人間を激しく拒絶するようなもの。その神域では動植物の殺傷が禁じられたという。そこに「神話的思考」「野生の思考」を重ねれば、前年の《対称性人類学》と連続してくるだろう。

ところで、あなたにとって「自由」とはどんなことだろう？　一般的に私たちは、「神」から逃れること、決まりがなく好き放題やること＝自由、ととらえがちだが、現実に私たちはいま自由だろうか？　「そうじゃないよねぇ」と中沢教授。ある規律や規則を守りながら自由を感

じられることは多々ある。たとえば、宗教を敬虔に信じる人たちに言わせれば、その宗教の規律や教えを守り「聖なるもの」と触れ合うことで多くの自由を感じることができるという。修道女たちも限られた空間で神の教えを守ることで満たされる。音楽も同じだ。音色の中は規則正しく構成された音符のつらなりによって私たちを感動させる。「モーツァルトの音楽は素晴らしいですよ！」と

講義が終わると質問者の列ができた。１人ひとりにていねいに応答する教授

『チベットのモーツァルト』の教授は言った。なるほど、規則・コードのもとに奏でられる音楽が喜びをもたらすように、アジールを支配する「聖なるもの」の掟やルールによって、人はそこで自由となったのだ。

興味深い話があった。平泉テキストにも「天童法師」の記述がある。いわゆる山岳修験の山伏である。

「彼らは山に入る時、社会的な（世俗的な）自分の葬式をし未生の者として再び山に育ててもらうのです」と講義は進む。「山という空間はまさに《聖なるもの》の入り口であり、世俗的な自分を捨て再び生まれ変わる。山は〈母〉の象徴なんですね。子が法師。母の胎内を借りて世俗の人格とは違う人間として生まれ返る。修験道にみるこの母―子の信仰形態は〈八幡〉と呼ばれました。そして、日本の至るところに広まっていった」

## 「聖なるもの」に触れるとき

アジールは近代とともに絶滅したのだろうか。そうではない、現代にこそ引き継がれなければならない、と教授は言う。たとえば、現代の国際政治における亡命問題を考えるときにも「アジールの思想」が原点であるように。

私たちはいま「聖なるもの」に触れることはなかなかない。私たちが住む社会は、〝正常〟の軸からはみ出ない、日常生活を送ることのできるレベルに保たれている。ここでは「聖なるもの」のような非日常的な感覚は、タブーだ。「でも」と教授は力をこめる。「私たちの根源には、戦慄する〝非人間〟な部分が必ずある」「日常生活では抑圧されているが、ここを捨て切ってしまうと人間としての全体性がなくなる」。宗教的なものの希求、また芸能やスポーツ、祭りもどこかで「聖なるもの」の感覚を持続したいという心の発現――。そうなのかもしれない。

## 多摩のアジール…

ふと教室の空気がとまった。中沢教授の視線は一点を見つめている。そこには居眠りをしている男子学生がいた。じーっと無言で見つめる、みんなも見つめる、講義も中断。10秒、20秒……誰かに背中を叩かれて起きた彼を見つめて一言。柔らかい調子で「おはよう」……居眠りはとっても目立ちます！

アジールのもっと深い内部構造を説明するところでチャイムが鳴った。90分はあっという間に過ぎた。教室をでて暑い日差しを浴びたら、夢が覚めて違う世界から日常に舞い戻った――そんな気になった。

ハタと思う。出入り自由、風通しのいいあの授業空間そのものが「多摩のアジール」なのかしら、と。

**（学生記者　阿部恭子＝総合政策学部３年）**